

# 西東三鬼研究

——医療人とくに歯科医療人として詠んだ俳句を中心に——

北野 元生

## 〔抄 録〕

俳人であり歯科医療に携わった歯科医師であった西東三鬼が診療人とくに歯科診療人として詠んだ「診療俳句」を取りあげ、その文学性及び現代性について論考した。三鬼の俳句については、平易な用語を使用しており、その内容も明快であり、一般人にとっても理解しやすいと言えよう。彼の俳句は彼の人柄や彼の来し方を反映して貧しい人や孤児に対して情感を寄せている作品が多い。患者個々人に向けた診療行為を詠んだ俳句作品は極めて小さなものに過ぎないとはいえ、その作品が内在する本来的な人道思

想や博愛思想に通ずる救済観と生命観がその句の中で沈静するものではないことを明らかにした。

さらに本論文では、「診療俳句」という分野が俳句の一分野であることを指摘した。「診療俳句」の輪郭をつけることの意義は決して小さいものではない。

キーワード 西東三鬼、歯科医療、診療俳句、新興俳句、山口誓子

## 一、本研究の目的、および西東三鬼の略歴とくに 診療活動歴 — 序言に代えて

### 1) 本研究の目的

本研究の目的は俳人で医療に携わった歯科医師の西東三鬼（以下、三鬼と省略する）が診療人とくに歯科診療人として詠んだ俳句を、所

謂「診療俳句」<sup>1)</sup>という枠付けで括ることが適当であることを明らかにし、三鬼の「診療俳句」について、とくに医療側の立場から解析し論考し、その文学性及び現代性についてを考察することである。さらに三鬼の「診療俳句」を通して、診療に携わる医療従事者が詠んだ作品を、「診療俳句」という概念で括ることの意味と意義を明らかにすることをも、目的の一つに加えた。

そこでまず、一般に明らかにされている三鬼の略歴を述べ、次いで歯科医師としての活動歴について新たな視点で調査した結果を含めて述べる。

## 2) 西東三鬼の略歴と人物像

俳人三鬼とは如何なる人物であつたか。彼の経歴は、とくに三鬼の門下である俳人三橋敏雄<sup>2)</sup>らによって詳しく述べられている。三鬼の本名は齋藤敬直である。一九〇〇年（明治三十三年、以降本論では西暦年を記す）岡山県吉田郡津山町大字南新座（現在の津山市南新座）に教育者の三男として生まれた。一九二五年三月日本歯科醫學専門學校（現在の日本歯科大学生命歯学部）を卒業し、同年十一月に歯科医師（歯科醫籍11964號）<sup>3)</sup>の免許<sup>4)</sup>を得るや、長兄在勤のシンガポールへ渡り、そこで歯科医院を開業した。この年の五月に、はからずものちに彼を苦しめることになった治安維持法が成立発効した。彼は三年足らずで帰国したのであるが、帰国後の一九三三年、勤務先の東京神田の共立組合病院和泉橋病院で同僚医師や患者に薦められて、三十歳にして初めて俳句を作る。折しも新興俳句の勃興期であつたが、その機運に乗って、師系と季語をもたぬ三鬼ではあつたが、たちまち頭角を現し新興俳句の旗手といわれた。そして、当時新興俳句を目指していた「京大俳句会」に乞われて参加した。しかし「京大俳句会」に参加した一九三六年には肺結核を発症。一九三八年には危篤状態に陥つたが奇跡的に回復した。同年に歯科医業は廃業し、以後実業家になる。一九四〇年、処女句集『旗』（三省堂）を上梓した。本句集の

代表作を数句あげておく（括弧内は発表年と初出誌）。

水枕ガバリと寒い海がある

（一九三六年、『天の川』三、『京大俳句』三）

白馬を少女瀆れて下りにけむ （一九三六年、『俳句研究』七）

三階へ青きワルツをさかのぼる （一九三六年、『京大俳句』六）

緑陰に三人の老婆わらへりき （一九三六年、『京大俳句』八）

昇降機しづかに雷の夜を昇る （一九三七年、『京大俳句』七）

一九四〇年、この年いわゆる京大俳句事件が起き、八月、三鬼も特別高等警察により検挙された。十一月、句作活動中止を条件に起訴猶予となった。一九四二年、三鬼が興した商社の神戸支社を拠点に商売を続けるために単身東京を離れ、神戸に移住した。

一九四五年八月の終戦を経て、彼は句作を再開した。一九四八年、京大俳句会での盟友で、京都大学出身で精神科医師・平畑静塔（当時、大阪女子医科大学附属香里病院教授、一九〇五年—一九九七年、九十二歳で死亡、以下静塔と略す）の薦めで歯科医業に復帰し、大阪女子医科大学附属香里病院（大阪府北河内郡寝屋川町群、後に住所表示が寝屋川市香里本通町へ変更される）の歯科部長として勤務することになった。正式辞令は、一九四九年四月一日付けである。この前後、現代俳句協会の設立と山口誓子を擁して『天狼』を創刊するなど、三鬼は俳句界にとって極めて重要な働きをした。

一九五六年七月三十一日付けで大阪女子医科大学（一九五四年に関西医科大学と改称）を退職して東京へ戻り、角川書店の『俳句』誌の編集長に就任したがこの間の事情はあまり詳らかにはされていない。

一九六一年、俳人協会の設立に参加した。同年胃癌を発病し、翌一九六二年四月一日永眠。享年六十二歳であった。

### 3) 西東三鬼の歯科医師としての職歴とその特徴

三鬼が歯科医師としての職能を果たしたのは、日本歯科医学専門学校を卒業してシンガポールでの歯科医院開業から一九三八年十二月頃に歯科医師を廃業するまでの十三年間（これを本論文では「前期歯科医時代」とする）、および大阪女子医科大学附属香里病院の一九四九年四月一日付けで就職してから一九六一年七月三十一日付けで退職するまでの七年三ヶ月間（これを本論文では「後期歯科医時代」とする）である。前期十三年間と言っても、シンガポールでは腸疾患をわずらい、また後半の一九三六年からは結核療養を余儀なくされているから、実質は十年間に満たない。筆者が注目した点は、三鬼が日本歯科医学専門学校を卒業後、母校の研究室や医局、あるいは母校以外の医局等に所属した事実を確認することができなかったことである。筆者が涉猟した限りでは、三鬼は歯科医業において、かなり自由人として一匹狼的に振る舞ったと感じられる。

戦後、大阪女子医科大学附属香里病院に歯科部長として勤務したことに<sup>5</sup>については関西医科大学の校友会に、記録が残っている。すなわち一九四七年にこれまで国立の青少年療養施設を大阪女子医科大学が買い取って香里病院が開設されたのであったが、一九四九年三鬼が歯科部長としての就任（実際は前年の暮れより、前任の歯科部長が退職した後を引きついでいる）、そして一九五四年十二月に大阪女子医科大学

学が男女共学の関西医科大学として改編成された後、歯科診療部門が閉鎖されたこと、一九五六年の歯科部長辞職についての記録がある。香里病院の歯科部長職としては七年間強勤務したことになる。

ところで、三鬼の一般的な評判としては、彼の盟友として名前の挙がっている俳人の三谷昭に「三鬼は「病院勤めがいやだったし特に歯科医の仕事がいやでいやでたまらなかった。それは勤務先の病院での三鬼の仕事ぶりを見ているからよくわかる。」と言われている。このことは三鬼の次男の齋藤直樹の発言にも同様の感想が述べられている。これに関連して、診療中の患者を放置して俳人仲間との談話にふけていたとか、診療用の『金』を貴金属店に持って行って酒代を工面したというような評判が主として俳人仲間間で流布しており、それが面白おかしく世間に知られていたようである。しかし、あくまで筆者の感想であるが、このような勤務態度で、私立の大学で、公的な機能を担う大病院の七年間に亘る歯科医師としての勤務が許されるはずがないと考えるのが自然である。

三鬼の母校である日本医科大学では、彼が一九三九年に歯科医師を廃業し、戦後大阪女子医科大学（のちの関西医科大学）附属香里病院の歯科部長として復帰したことも、彼が一九五六年に関東へ戻ったことも把握していなかったようである。三鬼が母校との関係を、とくに太平洋戦争中と戦後は完璧とは言えないまでも極めて希薄にしていた理由を明らかにすることは、本論の重要課題であると考えられたのであるが、今回の調査ではそれを詳らかにしえなかった。俳人三鬼が自校の卒業生である「齋藤敬直」であることを母校側が知るに至ったの

は殆ど平成の世になってからと思われる。<sup>10</sup>

以上の三鬼の職歴にかんしては、三鬼の母校である日本歯科大学生命歯学部附属図書館および日本歯科大学新潟生命歯学部「医の博物館」に保管されている同窓会記録等、戦後、三鬼が歯科部長として勤務していた関西医科大学に残された校友会（同窓会）の記録<sup>12</sup>、また岡山県津山市の津山郷土博物館に保管されている三鬼関連の諸資料等によるものである。

ほかに三鬼から直接俳句の指導を受けていた俳人で眼科医の八木三日女氏（大阪女子医科大学卒業、堺市在住）の聞き取り調査によって、香里病院での三鬼の生活を明らかにすることができた。またさらに、同じく直接指導を受けていた俳人白石不舍氏（岡山県津山市在住）、および三鬼の門下である俳人の故三橋敏雄の夫人の三橋孝子氏（神奈川県小田原市在住）に対する聞き取り調査によって得られた証言などを参考にしたものである。これらは次々項の「三、仮説の証明と考察」において、逐次述べることにする。

## 二、本論文の作業仮説

三鬼は昭和俳句の鬼才中の鬼才で業師の異名を持っている。これは機略縦横な彼の句作を指して言っているのであるが、その裏では三鬼はどうしようもない稀代の漁色家、ニヒリスト、快楽主義者、浪費家、はったり家、策士等々、大げさに言えば悪徳の代表者になりかねないほどであるが、これらが一般的な彼の評価のようである。かかる他にみられないような悪評で評価される人物像が成立するに至るにはそれ

相当の状況証拠があつてのことであろう。にも拘らず、三鬼の本当の人物像はどこかに隠れている可能性は高い。

三鬼の伝記や風評はこれまでのところ俳人側から作られたものであつて、医療側からのものは寡聞にて聞かない。彼の生業である歯科医師についての像も俳人組織が総体として作り上げた三鬼の虚像ではないかとも考えられる。彼の実像はどこかに隠れているのではないか。これがさし当つての本論文作成における作業仮説である。彼の歯科医師としての実像に迫ることも彼の俳句活動の全貌を明らかにするためには不可欠であるとの見地から、彼の歯科医師としての勤務状況を把握して、医療側からのメスを入れることを試みた。

歯科医師としての勤務状況を把握する目的で、先述の三鬼の母校や勤務病院での調査のほかに、三鬼の作品である俳句を取り上げることにした。三鬼の俳句は『西東三鬼全句集』（平畑静塔、三谷昭監修、都市出版社、一九七一年初版）（以下、『全句集』）<sup>16</sup>を取り上げた。これには、三鬼の詠んだ俳句および俳論やエッセーなどが収録されている。その中から、三鬼が直接診療に携る状況を描く俳句と、診療活動に関係する彼の病院やその周囲の環境を描く俳句（これらを併せて、本論文ではとくに「診療俳句」と称する）を抽出した（文末添付資料）。比較検討をする目的で、静塔の『平畑静塔全句集』（限定五百部）（中田亮編集、沖積舎、一九九八年出版）<sup>17</sup>を取り上げて、三鬼と同じく静塔の「診療俳句」を抽出したが、本論では静塔句の詳細は省略した。<sup>18</sup>

さらに、三鬼に関連する膨大な俳人側からの三鬼俳句についての句

評、三鬼についての人物評、等々であるが、これは三橋敏雄・坪内稔典共著の「西東三鬼文献解題」(『俳句』一九八〇年四月臨時増刊「西東三鬼読本」<sup>19</sup>)を参考に諸文献を渉猟した。

### 三、仮説の証明と考察

#### 1) 西東三鬼の「診療俳句」の概要

まず、文末に添付した資料《西東三鬼の「診療俳句」・一覧》を参照していただきたい。筆者の調べた範囲では、三鬼が詠んだ句は『全句集』ほかで調べられた範囲での総数は二八六八句である。自身の診療活動に直接関連して詠んだ句、および診療環境について詠んだ句の併せた「診療俳句」の数は七十九句であり、総俳句数の2.7%を占めていた。

静塔の俳句では、『平畑静塔全句集』にあげられた句は総数で四七六〇句、うち「診療俳句」と考えられた句は一二三句である。『平畑静塔全句集』においてのそれは一九二七年から一九九四年までの六十三年間(京大俳句事件や応召されて作句を中断していた四年間を差し引く)に総数四七六〇句を発表し、うち一二三句は「診療俳句」に相当している。総数に占める割合は2.56%であった。三鬼、静塔ともに決して膨大な数の「診療俳句」を詠んだとは言えない。しかし全句数に占める割合は両者ともに、極めて近似していることが注目された。

#### 2) 西東三鬼の「診療俳句」のうち十一句についての鑑賞

三鬼の「診療俳句」を通覧するに、その内容についての解釈に苦し

むような俳句は皆無といって良い。三鬼の俳句は一般に平易な用語を使って口語調で詠んでおり、その内容も明快であり、一般の人にとってもかなり分かりやすいと言えよう。

三鬼すなわち歯科医師齋藤敬直が「診療俳句」を発表したのは、戦後大阪女子医大附属香里病院に勤務した時期に集中している。そしてそれらの初出の雑誌は三鬼や静塔らが山口誓子を擁して立ち上げた『天狼』を中心に発表されているが、その俳句はどのようなものであろうか。それらの俳句にその折々の彼の心情はどのように表現されているのか。

そのことを明らかにする目的で、文末に資料として挙げた三鬼の「診療俳句」のうちの十一句を取りあげて鑑賞を試みる。ただし、鑑賞と言ってもあくまで医療の立場からの、或いは筆者個人による俳句鑑賞であることをあらかじめ断っておかなければならない。

**枯野の木人の歯を抜くわが能事**(一九四九年、『天狼』2、3合併号)

本句は昭和二十四年に詠まれた作品である。わが能事とあるように歯科医師の仕事に復職した時の感慨であろう。三鬼は大阪女子医科大学の歯科部長としての職を得るまでの十年以上を歯科医師としての仕事から離れていたのである。人の生命や健康を守るべき新しい環境での仕事である。すでに五十歳に近く決して若くはなかった三鬼にとって、職場としては結核と精神病にほぼ特化されており、生活弱者である孤児や貧困者の多い病院での二度目の歯科診療生活については、彼なりの目的意識、使命感や診療意欲があったはずであるが、それにし



てもかなり過酷な労働に耐えざるを得なかったことが推察される。三鬼が自身の結核の再発を恐れつつ、また彼の前期歯科医師時代とは違って、かなり将来が茫漠としていたと思われる戦後の新職場での後期歯科医師時代を生き抜くためにもそれなりの奮起が必要であったはずである。「わが能事」とは彼の生業に再び開始することへの決意表明であると感じられる。「人の歯を抜く」とは一般人にも分かりやすい諧謔を含めた自分の仕事の説明である。本句は三鬼の所謂「診療俳句」の嚆矢とも取れる作品である。

### 悴みて貧しき人の義歯作る（一九四九年、『天狼』2、3合併号）

三鬼の後期歯科医師時代である一九四九年から一九六〇年代の初頭までの日本の医療状況を考えてみたい。現在では、国民皆保険と言われるほどにわが国の社会保障制度とくに医療保険制度は世界に誇れるほどによく整っていると言つてよい。一九六一年にやっとその制度の整備が全国的に達成されたようである。すなわち、三鬼が女子医大病院に勤務を始めた頃は、まだまだ保険制度の埒外にあった人が多かったのである。治療費が充分に払えない人々の診療は個人で経営する市中の病院や診療所では充分に対応しきれず、多くは公的な病院に回されていたようである。従つて公的な病院ほど医療費の払えない人びとの診療を受け持たざるをえないため、病院の経営は苦しく、建造物や施設の整備や修理修繕は老朽化が進んでも遅れ勝ちとなり、従業員である医師や看護師等職種を問わずかなりの長時間労働や重労働に耐えなければならなかった。そのような時代の三鬼の勤務した私立の大阪

女子医科大学附属香里病院はもとと大阪府の代用精神科病院として位置づけがされていた個人の精神科病院であつたものを大戦末期国が買い上げて、その頃亡国病とまで言われた結核病に特化した診療科を付設した病院であつたから、私立ではあつても公的病院の一つとして地域住民の医療に協力することが要求されていたはずである。『全句集』には、三鬼晩年の「葉山雜記」と題するエッセーの中で、敗戦後の浮浪者を収容した病院であつたとの記載がある。「悴みて貧しき人の義歯作る」を読めば、当時、歯科医師自らが暖房の調っていない歯科技工室に籠もつて歯科技工に励んでいる姿を髣髴とさせる。

### 屋上に双手はばたき医師寒し（一九五〇年、『雷光』2）

本句は『雷光』二号（戦後三鬼が指導した「雷光俳句会」の機関誌である）には、「屋上にはばたきはばたき医師貧し」として掲載されたのが初出である。かれの第三句集には『今日』では「屋上に双手はばたき医師寒し」と推敲されている。寒風に吹かれながら、はばたいているように体を温めている様子が感じ取れる。そのはばたいている医師とは三鬼自身であつたと思われる。体を動かして暖を摂っている医師も貧しいし寒いのである。「双手はばたき」よりも「はばたきはばたき」の方が医師の動きのやや滑稽な仕草がうまく表現されていると思われる。

一方、この句は三鬼の飛翔願望の表れであると評している論者がいる。三鬼晩年の作「青高原わが変身の裸馬逃げよ」などに見られる彼の変身願望、逃走願望の変形であるとするのである。三鬼が歯科医師

の仕事が本当は好きでなかったとの風評がこれらの句評になった要因なのであろうか。歯科医師としての勤務振りについては、大阪女子医大時代に静塔や三鬼に俳句の指導を受けた八木三日女によれば、「三鬼先生はちゃんと真面目に診療や病院の雑事をこなしておられた」と証言している。俳人で三鬼の門下の白石不舎は「現在世間で言われている三鬼の評のほとんどは正鵠を得ていない」と嚙んで吐き捨てるように言い切っている。門下の俳人の故三橋敏雄の夫人で俳人の三橋孝子も同様のコメントを述べている。多くの俳人仲間は三鬼を真面目人間と認めたくなかったのかも知れない。何か三鬼本人とは別の神話的三鬼像を作り上げているような状況があったように感じられる。俳人仲間にとっても、あるいは恐らく三鬼自身にとっても、「真面目な三鬼」なんか面白くもなんともなかったのかも知れない。しかし「三鬼には常にかかにかに変身しているような部分があり、何かとてつもなく疲れ切っていたのではないか」との山口澄子の評もある<sup>21)</sup>。

また、好きでもない歯科医師の仕事を返上して勇躍関東へ戻り、俳句三昧の生活をしたように誤解している人も多いようである。しかし、実情は三鬼はそれよりほぼ二年前に大阪女子医科大学附属香里病院の組織改変によって歯科診療部門が廃止されたので、三鬼は自分の職場を失っていたのである。しかし、このことは本論では詳しくは触れない。

腐れし歯あまたを抜きて枯野帰る（一九四九年、『雷光』2）  
寒き手や人の歯を抜き字を書かず（一九四九年、『雷光』2）

これら二句は「歯を抜く」という措辞で、歯科医師としての仕事に没頭している三鬼自身の姿をやや自嘲的に表現しているようである。この二句でも見られるように、医師や歯科医師以外の一般人でも自分の仕事を自嘲的に述べることはままある。第二句めの「歯を抜き字を書かず」は仕事にかまけて俳句を詠むなどの文筆作業がおろそかになるとの意味であろう。これら二句ともに季語の枯野や寒しを配し、作者の心情を吐露していると思われる。

病者等に雀みのらし四月の木（一九五二年、『天狼』4）

春たけなわ、木々には緑が満載になりつつある候である。しかし、木々は葉っぱのほかに、雀を満載している。病院の長期の入院患者にとって、鳥の鳴き声は何にもまして慰めであろう。この状況を作者のやさしい目が見つめている姿がうまく表現されている。雀をみのらすを強引に付け合せたが、三鬼のユニークで新鮮な境地が生じたものである。加えて、みのらすは普通は秋を連想するが、これを春四月に持つてくるという三鬼ならではの周到な用法であろう。

病孤児の輪がぐるぐると天高し（一九五〇年、『天狼』12）

病廊を蜜柑馳けくる孤児馳けくる（一九五〇年、『天狼』5）

土団子病孤児の冬永かりし（一九五四年、『天狼』6）

彼は生来優しい人物であるとの波戸影夫や鈴木六林男の論もあり、特に貧困な人や孤児達の診療をなさりにしていたとは思えにくい。上に揚げた句やそのほかの諸句がそれを証明していると思われる。患

者を一段低く見積もつたり、ピエロやモルモットに見立てて句を作つたり、滑稽な状況を設定してみせたりするのはときに見られる作句技術ではあるが、彼にはそんな患者に対しての小細工は一切ない。彼は真にリアリストであるという高柳重信の評<sup>24</sup>があるが、かかる患者や貧しい人々を詠んだ俳句の範疇では、彼はリアルに優しい気持ちを詠んでいる印象が強い。

揚句第一句めは入院中の孤児たちが、秋天の下、病院内の空き地に集まって輪を作つて遊戲に耽つている様子を三鬼の優しい目が見守つているところであろう。この句ではぐるぐるという声喩（オノマトペ）表現が注目されよう。現代では一般の会話で使われる副詞を多用する俳人はそれほど珍しくないが、当時としてはかなり新鮮な表現である。「水枕ガバリと寒い海がある」と同列に論じられるべき俳句であるが、声喩表現を副詞として用いる俳句表現としては三鬼に並ぶものはいなかったし、その故にこそ三鬼が言葉の魔法使いと評された一つの大きな要因であつたに違いないのである。それはともかく、病孤児たちの遊戲に同期した三鬼の気持ちの高ぶりが季語の「天高し」でうまく表現されていると感ぜられる。

第二句めは病棟の廊下を転がった蜜柑を追つて、入院中の病孤児が駆けている様子を、第三句めは病孤児たちが病院の庭で土団子を作つて永い冬を耐えている様子を詠んでいる。

さらに付け加えれば、彼の俳句はどちらかと言うと動詞や形容詞などを含む用言と、ぐるぐるなどの副詞そして声喩表現を多用する傾向がある。用言や副詞を多用する文体をとる俳句は、えてして具体的感

覚的な印象が強い<sup>25</sup>。俳句に詠む対象が外界の物象であろうと、心中の精神の活動であろうと、それらを丁寧且つ正直に表現することを好むためであると思われる。

百の貧患者に寒のぼろ太陽（一九五五年、『天狼』2）  
極寒の病者の口をのぞき込む（一九五五年、『断崖』3）

彼の俳句は貧しい人や孤児に対して情感を寄せている作品が多い。作者である三鬼すなわち齋藤敬直が貧しい階層の患者や孤児に対する暖かい心情を持つて接している情景が偲ばれるようである。百の貧患者とは大勢の貧しい階層の患者たちという意味である。極寒の病者は字義通り読めば、寒中の患者ということであるが、寒や極寒という措辞で、重症であり退院などは望めない重症患者の状況を暗示しているようでもある。

これらの俳句、とくに第二句めを前にして、八木三日女や白石不舍など三鬼を直接知る人の言を勘案すれば、三鬼が診療が好きではなかった、あるいは嫌いであつたとか、診療をなおざりにして、いい加減な治療行為を繰り返していたなどの評は的を射てはいないと思われる。

### 3）西東三鬼の「診療俳句」の文学性と現代性

「診療俳句」として取り上げた西東三鬼の七十九句については、これらの多数は彼の第三句集『今日』に収録されているものである。静塔をはじめ世の多くの俳人たちは『今日』を挙げて、「三鬼は疲れている」と評した（三鬼の句集『今日』の「後記」）。戦前世間の瞠目を



一身に浴びた第一句集の『旗』、終戦前の長い空白を吹き飛ばすような戦後の第二句集の『夜の桃』に比較して、流暢と充実に欠けるものがあつたという。このことは三鬼の俳句のピークを下降し始めていたのであろうか。いま、ここで『今日』を俯瞰してこれを述べることは本論の任ではないが、たまたま三鬼がいわゆる「診療俳句」なるものを詠んだのが、この彼の俳句のピークが下向したと評される時期に当たるわけである。これは静塔にも言えることではあるが、いわゆる「診療俳句」はその性格上視野が限られた俳句であることが多い。本来三鬼の俳句は彼が俳句の師を持たず、自由人として俳句を詠んできたのであるから、既述した彼の戦前の俳句で見られるように、口語で詠んだのびのびとしたわかりやすい作品が彼の本領であるというべきであろう。それが『今日』を編んだ時代は彼が大阪女子医科大学病院に就職し、病院に拘束され自分の身の回りの出来事を中心にした言わば境遇俳句を詠まざるを得なかったである。しかし、そんな境遇俳句の一分野に属すると思われる、先に述べたいいわゆる「診療俳句」の多くに大いに心を動かされるのである。

三鬼の戦後の俳句は山口誓子（一九〇一年—一九九四年）を抜きにして語ることではできない<sup>26</sup>。誓子と三鬼はもともと「京大俳句」の仲間であつたが、先述の「京大俳句事件」に連座することもなく、病身でもあり戦中は戦禍を逃れて地方都市に疎開しており、疎開先で句作に励んでいた。その時に詠み貯めた作品を読んだ三鬼と静塔は大いに感銘を受け、誓子を主宰とした俳句結社「天狼俳句会」を立ち上げるに至つたのである。誓子は「京大俳句」の一員であつたが、徹底して有

季定型の俳人であり、厳格な意味で誓子は新興俳句人ではなかつたと言われても仕方がないと言える。三鬼が誓子に密着して得られたものの結果が第二句集の『夜の桃』であり先述の『今日』であつた。「京大俳句事件」後の長いブランクからの復活を印象付けた第二句集『夜の桃』では嘗ての「新興俳句」の三鬼の特色や特徴が多く残されていたのであるが、第三句集『今日』に至つては、誓子に兄事した三鬼の負の面のみが目立ってきかと思われたのであろう。「二人の接近によつて、誓子は光を三鬼は闇を背負わざるを得なかったのに加えて、誓子の有季定型俳句の枠の中で、三鬼は一生を棒に振つてしまった」という、鈴木六林男をはじめとして、多くの論評がある。

鈴木<sup>27</sup>の論は三鬼についてのいわゆる「新興俳句」が消滅したこと、少なくとも希薄化したことを惜しんでこのような評を書いたものであろうが、他方で好意的な見方をする人もいる。三谷昭は、三鬼が誓子に近づいたのは、誓子作品に渴仰し、「生」の極限と感動の根源とを見極める方向に、さらには實在の真実に観（見）入るという方向を、三鬼は自身の戦後の作句の指標とするべく決心したのであろうと述べている<sup>28</sup>。指標の変更の結果、三鬼の作品の抒情は「周辺」に拡散する方向を持ちながらも、一方では「私」に回帰する作品が次第に数をましてきいたのであろうと評しているのである。三谷の論は三鬼の根源俳句の誕生の秘密を分析したもので、戦後の三鬼俳句の本質を衝いているのかも知れない。しかし三鬼についての文学的な本質論としては鈴木の見解と変わらないのは、本来的に三鬼に備わっている俳句観や文学的資質と誓子のそれらが水と油ほどに異なつていたということであ

る。

この三谷の論を裏付けるものとして、榎本冬一郎<sup>(29)</sup>の論を紹介すれば、三鬼が誓子を担いで創刊した『天狼』創刊号に掲載された三鬼の「過酷なる精神」と題する論を紹介しているが、「俳句は季節現象を詠う詩なりという定義は、『季節は根源に達する門なり』と改めるべきではないか」との指摘をしていることをあげている。この論はまさに、三谷昭の意見を裏付けるものである。三鬼本来のものと誓子的なもの両者が三鬼の中で綯交ぜになった上で、それをいかに止揚させるかについて、苦悩していたことを物語るものである。いずれにつけても、三鬼の俳句が誓子との接触の結果、内向きになろうとしたときとまさに同時期に彼のいわゆる「診療俳句」が成立したのであることは事実である。

さて、筆者は本論のテーマとして西東三鬼の「診療俳句」を取り上げたのであるが、そもそも「診療俳句」、あるいは「診療分野の俳句」がこれまで一般に認識されたことがあったであろうか。新興俳句の重鎮とされる俳人の水原秋櫻子<sup>(30)</sup>（一九六一年没、享年八十八歳）も産婦人科医師としても高名であったが、「芍薬や医をわすれゐる今日の閑」などの句はあるが直接診療に拘わったような俳句は殆ど管見に触れない。三鬼や静塔のあとにも、これと言ったまとまった「診療俳句」の作家は見あたらない。俳人安井浩司<sup>(31)</sup>は歯科医師であるが、彼に「白の原種蓮とゆきかい乳歯落つ」のような句があるが、これはもちろん診療俳句には当たらないし、ほかにも診療俳句に該当する俳句は見当たらない。

「広島や卵食ふとき口開く」は三鬼の代表句の一つである。歌人の塚本邦雄や詩人飯島耕一<sup>(32)</sup>によれば、三鬼の全句の中でも狂気を孕んだポエジーをもつとも多量に放電した作品であると言っている。この句が世界や宇宙に向けて開けた俳句であるならば、三鬼の「悴みて貧しき人の義歯つくる」は狭い空間に向けた、いわば個に閉じこもる俳句であるとも言える。なぜかと言えば、診療とは本来矮小化された行為、医者個人が患者個人に相対して初めて診療という行為が成立するからである。しかも、その一面面をのみ切り取って短い詩形を作り上げるのであるから、本来的にその句は個へ向うのは宿命とも言うべきである。しかし個々に向けた小さな俳句作品が何ゆえに人を感動させるのであろうか。その作品に含まれる診療という行為が有する本来的な人道主義や救済、生命観がその場の小さな現場にとどまるものでは決してないからではないか。そうであるからこそ、この俳句のようなむしろ小さいはずの句柄が常に新鮮さと知的なものを我々に提示しているのである。三鬼の作品にはそもそもが知性と今日の時代に迫る現代性があるし、その知性はまた一方で俳句必須の諧謔性と相反するものでは決していない。

それにもまして、三鬼の「診療俳句」が三鬼自身に影響を与えたと思われる点について触れておく。三鬼の新興俳句時代の第一句集『旗』から第二句集である『夜の桃』にかけて見られる、想像の世界（虚構）とマス（群）への偏執、暗さ、孤独さ、劣等感、虚無感、過剰なエロチシズム、機智にかった構図描写等々一般にややネガティブとも受け取られかねない彼の諸々の資質が「診療俳句」を詠み始めた

頃、すなわち戦後の俳句ではずいぶん抑えられているようである。このような意見は先述した田川飛旅子の論にも見て取れるのであるが、「診療俳句」を詠んだことでこのような結果が得られたのか、あるいは三鬼が戦後の彼の状況の変化で致し方なくであるとしても、そのように変貌を遂げた結果、彼のヒューマニティ氣質を直截に表現した「診療俳句」のような率直な状況が詠めたのか、筆者のみるところどころも首肯できそうである。とまれ、「三鬼は疲れている」と言う三鬼の第三句集『今日』に対してなされた論はやや一方的で、幾分かは的を外れた指摘ではないか。

戦前の彼はいわゆる「新興俳句」の旗手ともてはやされ、「新興俳句」の鎧を着て颯爽と俳壇にデビューしたのである。その「新興俳句」の美学が斯くもたやすく官憲の手で、あるいは敗戦を以て壊滅されてしまったのである。確かに現実としてはその通りであつたろう。しかし、おそらくそれが官憲の手や戦争という外力に依らずとも、早晚必ず崩壊する体質を有していたからではないかとは先に引用した安井浩司の論<sup>34</sup>である。

冒頭の「広島や卵食ふとき口開く」に加えて「水枕ガバリと寒い海がある」を詠んだ高邁な詩心を有する俳人が「悴みて貧しき人の義齒作る」と詠まざるを得なかったのは、「新興俳句」の衰退は必然的なものであつたし、「新興俳句」の実態が幻であつたことを否が応でも認識せざるを得なかったからではないか。それでも「新興俳句」で培われた、刈り取りがたい芯のようなものが三鬼の中に残存していたに違いなかった。それが、所謂「診療俳句」の分野に於いても、それが

彼が新しく開拓した分野であつたとは言えないまでも、先に述べてきたような人道・救済・生命主義<sup>35</sup>を素直に前面に押し出すことを切り口にした、新鮮な俳句の数々が詠みだされたのではなかったか。そして、このような俳句表現はこれまでの三鬼にはなかった面であつた。そうであるからこそ、周囲の人びとの戦前の新興俳句としての三鬼俳句の復活という期待は見事に裏切られたのかもしれない。しかし、先述した生命主義俳句・根源俳句への道を開くものであつたに違いない。診療という行為が生命主義に通じることは明らかなからである。

また、「三鬼は日頃から病む者に対しては異常なほどのいたわりを示した。」とは先に引用した山口澄子の論<sup>36</sup>がある。この論からは、三鬼の「診療俳句」で、三鬼自身が当然あるべき姿を見せただけであつたとも言えよう。「西東三鬼の生涯は、心ならずも演じていたことどもが多過ぎたのではなからうか」と彼女の論は終わっているが、少なくとも、「診療俳句」の中に三鬼の真の人間性が率直に吐露されていたのではないだろうか。沢木欣一は「三鬼は悪評を一身に受けながら、実は聖なる天使の魂を宿していた人」と評価しなおしている。

三鬼がこの世を去つてすでに五十一年以上が過ぎ去ろうとしている。しかし三鬼の存在は彼の生存中よりも一層輝かしく確かなものになって来ているとも考えられる。彼は彼の最晩年とも言える一九七〇年に俳誌『断崖』四月号に次のように書いている。<sup>38</sup>「俳句の伝統性は、個として存在する我を、深く凝視し、その確定を続けていくことである。……中略……。私が要請するのは次の二つの範囲に入る。イ。純粹な個我（何某個人）として作句してゆくこと。ロ。個の立場をとりつつ、

他に同種類の個が存在することを常に忘れて作句すること、……中略……、存在としての我を、常にいきいきと新しく表現してゆきたいと思う。」と。このような俳句論は三鬼が晩年になって遂に達した俳句作家としての境地であったのかもしれないが、このように自論を明確に述べるこそが、三鬼が今なお若い世代の俳人達の支持を得、彼の句や論が受け入れられる最大の理由であるのかもしれない。安井浩司<sup>39</sup>は「三鬼の現代俳句に与えた影響は絶大なものがあつた。（今後の）俳句形式が、三鬼というものを分割し、それを三鬼とし、さらに小三鬼を、どんどん作るような方向にあるのは間違いない。」<sup>40</sup>と言いつつ切っている。このことは、子規に始まつた近代俳句が三鬼（ら）によって貴重な曲がり角を曲がつたと言ふべきなのかも知れない。

それはともあれ、マスから個へと、あるいは太平洋戦争以前の新興俳句の美学から生命を見極めようとする戦後の根源俳句へと舵を切り直した三鬼のポジティブな面がここに見て取れるようである。そして三鬼の「診療俳句」はその延長線上に位置するものであることは言うまでもない。

#### 四、総括と結論

西東三鬼の歯科医師としての人となり、とくに彼の詠んだ診療に係わる俳句を通して考察を加えた。そして次のような問題点が浮かび上がってきた。

（一）西東三鬼は俳句に関しては一定の師系に属さず自由に俳句を詠んだと言われているが、まさに歯科医師としても自由人であつたよう

である。このことを裏付けるであろう彼の他医との接触が殆どなかったことは履歴職歴の項で述べた。この故に、医療人としては、極めて孤高であつた。そして、そのことが彼の歯科医師としての職能に、ひいては彼の「診療俳句（の分野）」にも、更には彼の他の分野の俳句にも微妙に影を落していなかったであろうか。

（二）それはともかく、三鬼のシンガポールや東京での前期歯科医師時代のことはさて置いても、戦後の大阪での後期歯科医師時代の歯科医師としての生活と生き方が、世に喧伝されているようにちゃんばらんであつたとは考え難い。少なくとも、彼が詠んだ極めて多い数とはいえない彼の「診療俳句」を俯瞰することによって、このことはかなり容易に首肯できるのではないか。

（三）西東三鬼の詠んだ診療に係わる俳句を「診療俳句」という項目で括れるのではないかということについて問題提起した。三鬼の「診療俳句」が、彼の所謂根源俳句の原点を形造つたと言ふことが可能であるとも言える。三鬼の「診療俳句」を含めた俳句のひとつひとつが個々にではあるが、読者や若い俳人達の信奉と支持を得てきたものであることを考えた時、「診療俳句」の輪郭をつけることの意義は決して小さいものではないであらう。加えて、彼の「診療俳句」の及ぼした文学的な影響や刺激等については、さらに検討と考察を深める必要があると思われるのである。生業が医師や歯科医師など医療従事者である俳人は少ないのであるが、かかる観点から彼らの「診療俳句」をより広く調べてみるのが肝要であると思われる。



〔注〕

- (1) 北野元生「西東三鬼の診療俳句―屋上にはばたきばたき医師貧し」『船団』九十三号、二〇一二年六月、および、北野元生「西東三鬼の「診療俳句」を読む〔第一部1〕」『子規研究』二号、二〇一三年より連載中。これらに「診療俳句」の定義付けと概要を述べている。
- (2) 三谷昭「西東三鬼の人と作品」による。この論述は、西東三鬼著、平畑静塔、三谷昭監修、三橋敏雄、鈴木六林男、大高弘達編集『西東三鬼全句集』、一九七一年二月、都市出版社。本全句集の巻末に掲載されている「解説欄」につけられている。
- (3) 歯科医師免許證／岡山縣／齋藤敬直／明治三十三年五月十五日生／大正十四年三月日本齒科醫學專門學校ニ於テ受領シタル卒業證書ヲ審査シ明治三十九年法律第四十八號齒科醫師法依リ齒科醫師タルヲ免許ス仍テ此ノ證ヲ授與ス／大正十四年十一月十二日／内務大臣若槻礼次郎／本免許第一一九六四號ヲ以テ齒科醫籍ニ登録ス／内務省衛生局長 山田準次郎（以上、斜線は行替え）【本免許証は津山郷土博物館に保管されている。】
- (4) 日本齒科醫師會編纂『日本齒科醫籍録―附全国齒科醫師名簿』齒苑社、昭和五年二月。  
【以下の記載がある。一一九六四、岡山縣、齋藤敬直、明治三十三年五月生、大正十四年十一月十二日免許取得、大正十四年三月日齒（日齒は日本齒科醫學專門學校の略号）卒業。】
- (5) 学校法人関西医科大学昭和四十三年十月発行の『関西医科大学四十年の歩み』に【齋藤敬直、齒科部長として昭和二十四年四月一日から昭和三十一年七月三十一日まで在職】との記載がされている。（なお、前任の齒科部長萩原貞雄氏が昭和二十三年十月二十日付けで退職したとの記録あり。）また、昭和二十九年に大阪女子医科大学から関西医科大学に名称替えがあった昭和二十九年に香里病院の組織替えがなされ、齒科は精神科と共に廃科となっている。しかし、彼の職分は齒科部長として据え置かれていた模様である。しかし、この辺りの正確な事情を把握するのは、現在の時点ではきわめて困難で

- ある。ほかに、関西医科大学ホームページ『旧TOPページ』（IX、本学における人文科学研究と人間教育、A. 学部の人文化人）は平成十二年十二月時点まで公開されていた。この中には齋藤敬直（西東三鬼）のほか平畑富次郎（平畑静塔）の記事が記載されている。
- (6) 注(2)に同じ。巻末の三谷昭の「解説」を参照されたし。
- (7) 齋藤直樹インタビュー記事「名誉回復裁判と父・三鬼」『月刊俳句界』二〇一一年四月号。
- (8) 沢木欣一、鈴木六林男『新訂俳句シリーズ人と作品13西東三鬼』一九七九年、桜楓社。本書の鈴木は三鬼の直接の弟子の一人であるが、その彼の論を参考にした。
- (9) 下総高次「齒科医でもあった俳人 西東三鬼」『日本齒科医史学会誌』二十二(一)(通号八十九号)、一九九八年。
- (10) 中原泉「俳人西東三鬼DDS」『日齒広報(社団法人日本齒科医師会広報)』通号二一五七号、一九九九年二月五日。
- (11) 財団法人日本齒科醫學專門學校校友會本部編「財団法人日本齒科醫學專門學校校友會會誌」財団法人日本齒科医学專門學校校友會本部、大正十四年十二月。【齋藤敬直(十四(大正十四年卒業の意))、海外開業と記載されており、住所はNo.193 Orchard Road Singapore Strait Settlements とある。本住所は昭和五年十二月まで、そのままである。昭和六年十二月発行の同誌には「東京府荏原郡入新井町不入斗八二八、齋藤敬直(十四)」とある。昭和七年十二月発行分では「東京府大森區入新井四ノ八二八」、また昭和十二年十二月および昭和十三年十二月発行分では「東京市目黒區原町一二四五西山齒科醫院齋藤敬直」となっている。昭和十四年以降、大森區入新井五ノ二四五であり、以降、昭和二十年二月まで、住所の変更はされていない。その後終戦を挟んで昭和二十四年三月発行の日本齒科大学校友會々誌には卒業生の不明欄に齋藤敬直の名前のみが記載されているが、イロハ順の索引欄には齋藤敬直(十四)、大森との記載があり、名簿の記載そのものに混乱を生じている。その後、昭和三十一年発行の名簿も同様である。いずれにしても、齋藤敬直が大阪府寝屋川

市の大阪女子医科大学（関西医科大学）附属香里病院に在職していることは同窓会側から認識されていた様子はない。昭和四十三年十月発行の日本歯科大学校友会庶務部編『会員名簿―昭和四十三年三月現在』には、校友会創設以来の物故者の欄に第十四回卒（百四十名）の部に六十二名の物故者があり、その第四十二番目に齋藤敬直の名前があげられている。以降の発行分には、その変更はない。

(12) 注(5)に同じ。

(13) 岡山県津山市の津山郷土博物館に保管されている三鬼関連の諸資料。

注(3)であげた三鬼の歯科醫師免許證のほか、三鬼の蔵書等が保管されている。

(14)

俳人八木三日女氏（下山みち子、堺市在住、大阪女子医科大学卒業の眼科医師で、俳句については学生時代から三鬼や静塔に師事した）へのインタビュー（二〇一一年六月、堺市の三日女氏宅で）。「三鬼先生は診療や病院の雑事も大層熱心にはやっていた」と印象を語っている。

俳人白石不舍氏（白石哲、岡山県津山市在住、西東三鬼の最後の直弟子で、津山市における三鬼俳句会「綱」を引き継ぎ、現在主宰者）へのインタビュー（二〇一一年九月、津山市の自宅で）。「三鬼の関東行き（香里病院を辞職して、上京したこと）の細かい事情を語ってもらった。また、「三鬼は大変な小心者が弱かった。それと同時に、人にものを頼まれれば断われない性格であった。加えて、三鬼の悪い評判は三鬼の死後、どんどん増幅し来ている」とも語っている。白石不舍（白石哲）氏は平成二〇一二年二月鬼籍に入られた。

俳人の故三橋敏雄氏の夫人で俳人の三橋孝子氏（神奈川県小田原市在住で、生前の神奈川県葉山町に住居する西東三鬼とは家族ぐるみの付き合い）へのインタビュー（二〇一二年十一月に東京都内で開催された「富澤赤黄男・西東三鬼没後五十年の集い」において）。現在流布している三鬼についての評判は、俳人たちが貶めたものであると亡夫の敏雄がとても悔しがっていたと語っている。「でも、三

鬼先生自身はそのことを笑って面白がっていた」とも夫人自身の感想を語っている。

(15) 注(8)に同じ。

(16)

西東三鬼著、平畑静塔、三谷昭監修、三橋敏雄、鈴木六林男、大高弘達編集『西東三鬼全句集』、一九七一年二月、都市出版社（注②と同じ）。この全句集には、三鬼の第一から第四までの句集「旗」「夜の桃」「今日」「変身」のすべてが収められており、ほかに句集から漏れた句を「補遺」として補っている。ほかに自伝として「神戸」「続神戸」「俳愚伝」のほか評論文、時評、作品評、随想文、書簡文が収められている。ほかに三橋敏雄の手による三鬼の年譜や、平畑静塔、三谷昭および大岡信の解説文が巻末につけられている。この論文では、専ら本全句集を三鬼の俳句理解の基礎資料としたが、以下に挙げる彼の四冊の句集を参考にした。すなわち、『旗』、一九四〇年、三省堂。『夜の桃』、一九四八年、七洋社。『今日』、一九五一年、天狼俳句會。『変身』、一九六二年、角川書店（これらは、さいたま市在住の俳人酒巻英一郎氏の所蔵になるもので、ご好意によって検索させていただいたものである）。

なお、鈴木六林男編『西東三鬼集』（現代俳句の世界9、朝日文庫）、一九八四年八月初版、朝日新聞社。ここには、西東三鬼の第一〜第四句集に収められなかった句が、拾遺として収められている。このうち拾遺三は『西東三鬼全句集』に収納されきれなかったものであるが、本論文の参考資料として用いた。本書には齋藤慎爾による三鬼の略歴が併記されている。

(17)

中田亮編集『平畑静塔全句集』（五百部限定版）、沖積社一九九八年。本全句集には「初期作品（未刊）」「月下の俘虜」「旅鶴」「新編・栃木集」「壺国」「漁歌」「素」「竹柏」が収められているほか、平畑静塔についての「年譜」がつけられている。

(18)

北野元生「西東三鬼の所謂「診療俳句」の文章心理学的解析―平畑静塔の「診療俳句」との比較を中心として」『京都語文』二十号、二〇一三年十一月。平畑静塔の診療俳句についての一覧表を付けてあ

る。参考にしてほしい。

- (19) 三橋敏雄・坪内稔典共著「西東三鬼文獻解題」『俳句』、一九八〇年四月臨時増刊「西東三鬼読本」。坪内稔典による極めて詳しい三鬼についての諸文献の渉獵が記述されている。
- (20) 松田修「西東三鬼論―分析とその検証―」『香椎瀉』（福岡女子大学国文学会誌）十二号、一九六六年。
- (21) 山口澄子「葉山ノート」『俳句研究』一九七一年四月号（特集・西東三鬼）。
- (22) 波戸影夫「西東三鬼論―明晰か混沌か」『風』一九四八年七月。
- (23) 鈴木六林男「あたたかい三鬼」『俳句研究』一九五〇年八月号。
- (24) 高柳重信「戦後の西東三鬼」『俳句研究』一九六六年三月号―一九六八年四月号。
- (25) 注(18)に同じ。
- (26) この件については、三谷昭の論がとくに重要である。注(2)の三鬼全句集の巻末の三谷昭の「解説」を参照されたし。三鬼と誓子との関係に関しては、三鬼をはじめ、数多くの論者によって論じられている。
- (27) 注(8)の鈴木六林男の論がとりわけ重要であるが、多くの論者によっても同様の意見が述べられている。
- (28) 注(2)および注(26)を参照されたし。
- (29) 榎本冬一郎「『天狼』と西東三鬼」『俳句研究』（特集・西東三鬼）一九七一年四月号。
- (30) 水原秋櫻子「インターネット記事より取材」。
- (31) 安井浩司「西東三鬼論」『俳句評論』一九六九年九月号。のちに安井浩司『もどき招魂』端溪社、一九七四年十月に「さまよう鬼―西東三鬼ノート」と改題して所収。
- (32) 塚本邦雄「桃源の鬼―西東三鬼句集をめぐる―」『夕暮の諧調』人文書院、一九七一年に所収。
- (33) 飯島耕一「俳句の国徘徊記」書肆山田、一九八八年。
- (34) 注(31)に同じ。

(35) 安井浩司「戦後俳句考―戦後派の功罪」『俳句研究』一九八三年五月号。のちに、安井浩司『海辺のアポリア』邑書林、二〇〇九年に所収。

(36) 注(21)に同じ。

(37) 沢木欣一「三鬼の人柄」『俳句』（臨時増刊、西東三鬼読本）一九八〇年四月号。

(38) 以下の三鬼の発言は注(29)の榎本論からの孫引きである。

(39) 注(31)に同じ。

（きたの もとお 文学研究科国文学専攻修士課程修了）

（指導教員…坪内 稔典 教授）

二〇一三年九月二十七日受理

## 添付資料 西東三鬼の「診療俳句」・一覧

『西東三鬼全句集』 西東三鬼著、平畑静塔・三谷昭監修（三橋敏男・鈴木六林男・大高弘達編集） 都市出版社、一九七一年二月初版発行より（初出句と発表年度を示し、『全句集』で形の異なるものは、その句のあとに『全句集』と断わって付記した）。

## 『今日』所収分

柩車ならず枯野を進むわが移転（一九四九年、天狼二、三合併号）（『全句集』、柩車ならず枯野を行くはわが移転）

枯野過ぐ貧しき移転にも日洩れ（一九四九年、天狼二、三合併号）（『全句集』・枯野行く貧しき移転にも日洩れ）

枯野の木人の歯を抜くわが能事（一九四九年、天狼二、三併号）

悴みて貧しき人の義歯作る（一九四九年、天狼二、三合併号）（『全句集』・かじみて貧しき人の義歯作る）

水の月公病院の煙照らす（一九四九年、天狼二、三合併号）

枝鳴らす枯木の家へ帰れば寝る（一九四九年、天狼二、三合併号）（『全句集』・枝鳴らす枯木の家へ倒れ寝る）

いつまでも冬母子病棟の硝子鳴り（一九四九年、天狼五）

屋上に草も木もなし病者と蝶（一九四九年、天狼五）

新樹に鴉手術室より血が流れ（一九四九年、天狼六）

女医の恋梅雨の太陽見え落つ（一九四九年、天狼七、八合併号）

小児科の窓の蜂の巣蜂赤し（一九四九年、天狼十）

饅頭を夜霧がぬらす孤児の通夜（一九四九年、天狼十二）（『全句集』・饅頭を夜霧が濡らす孤児の通夜）

大枯野壁なす前に歯をうがつ（一九四九年、雷光十二）

女医の手に抜かれし臓腑湯気を立つ（一九四九年、雷光十二）

死後も貧し人なき通夜の柿とがる（一九四九年、雷光十二）

孤児孤老わらひ止らず柿の種（一九四九年、雷光十二）（『全句集』・孤児孤老手を打ち遊ぶ柿の種）

種痘かゆし枯木に赤きもの乾され（一九五〇年、天狼二）（『全句集』・

種痘かゆし枯木に赤きもの干され）

屋上にはばたきはばたき医師貧し（一九五〇年、雷光二）（『全句集』・

屋上に双手はばたき医師寒し）

鯨噛んで始まる孤児と医師の野球（一九五〇年、雷光二）（『全句集』・

鯨食つて始まる孤児と医師の野球）

コンクリートの女医の私室に飴赤し（一九五〇年、雷光二）（『全句集』・飴赤しコンクリートの女医私室）

夜の雪ひとの愛人くちすずぐ（一九五〇年、天狼三）

年新し狂院鉄の門ひらき（一九五〇年、天狼三）

寒の狂院両眼黒く窓々に（一九五〇年、天狼四）

人を焼く薪とさどさ地に落す（一九五〇年、天狼四）

病者起ち冬が汚せる硝子拭く（一九五〇年、天狼五）

病者の手窓より出でて春日受く（一九五〇年、天狼五）

わらわらと日暮れの病者桜満つ（一九五〇年、天狼五）

病廊にわれを呼び止め妊み猫（一九五〇年、天狼五）

病廊を蜜柑馳けくる孤児馳けくる（一九五〇年、天狼五）

狂院の向日葵の種握りしめ（一九五〇年、雷光六）

種痘のメス看護婦を刺し医師を刺す（一九五〇年、雷光六）

診療着干せば嘲る麦の秋（一九五〇年、天狼六、雷光六）

汗すべる黒衣聖母の歯をうがち（一九五〇年、天狼九）（『全句集』・汗すべる黒衣聖母の歯うがてば）

無花果をむくや病者の相対し（一九五〇年、天狼十）

秋来たれ病院出づる肥車（一九五〇年、天狼十）

病孤児の輪がぐるぐると天高し（一九五〇年、天狼十二）

木犀一枝暗き病廊通るなり（一九五〇年、天狼十二）

聖母より抜き取りし歯の乾きたり（一九五〇年、雷光十二）（『全句集』・聖姉妹（マメールのルビあり）より抜き取りし歯の乾きたり）

わが悪しき犬なり女医の股噛り（一九五〇年、雷光十二）

屋上を煤かけめぐる医師の冬（一九五一年、天狼二）

血に染む手洗へば朝の桜幽か（一九五一年、天狼五）（『全句集』・血ぬ



れし手洗ふや朝の桜幽か」

### 『変身』所収分

病院の奥へ水塊引きずり込む（一九五一年、天狼十）  
寒の中コンクリートの中医師走る（一九五二年、天狼三）  
病者等に雀みのらし四月の木（一九五二年、天狼四）  
いつまで何を指さす病者春夕べ（一九五二年、天狼四）  
夏はじまる原色べたと病者の画（一九五二年、断崖六）  
波うつ麦垣穂に病者伸びあがる（一九五二年、断崖七）  
職場へ行く枯向日葵を火となして（一九五二年、断崖十一）  
病室の床に光りて蟻動く（一九五二年、断崖十一）  
柿転ぶコンクリートの中死ぬまで病む（一九五二年、天狼十二）  
冬の蜂病舎の硝子抜けがたし（一九五二年、断崖十二）  
孤児の癒え近しどんぐり踏みつぶし（一九五三年、断崖一）  
共に寒き狂者非狂者手をつなぐ（一九五三年、天狼一）  
病室に置く新しき金魚と水（一九五三年、断崖五）（『全句集』・病舎へ  
捧げゆく新しき金魚と水へ断崖六）  
桜冷え白衣を脱ぎて看護婦病む（一九五三年、俳句六）（『全句集』・桜  
冷え看護婦白衣脱ぎて病むへ天狼六）  
土団子病孤児の冬永かりし（一九五三年、天狼六）  
剝製の雉子狂院の秋やすらか（一九五四年、天狼十二）  
百の貧患者に寒のぼろ太陽（一九五五年、天狼二）  
極寒の病者の口をのぞき込む（一九五五年、断崖三）  
病院の岩窪の霰夜光る（一九五五年、天狼四）  
貧しき退院胸に霰をはじきつつ（一九五五年、天狼四）  
桜ごし赤屋根ごしに屍者の扉（一九五五年、天狼六）

### 『全句集』に「補遺」としてまとめられている。

腐れし歯あまたを抜きて枯野帰る（一九四九年、雷光二）  
寒き手や人の歯を抜き字を書かず（一九四九年、雷光二）

患者みな貧し千羽の紙の鶴（一九四九年、雷光二）  
病廊を鼠逃るる老婆の死（一九四九年、雷光二）  
嬰兒の死白衣を脱ぎて女医帰る（一九四九年、雷光二）  
浴槽をめつむるあまた歯を抜き来て（一九五〇年、雷光二）  
病院の春雨鯨肉（くじらのルビあり）噛み悩み（一九五四年、俳句六）  
廻診終りたり秋の蚊を吹き払ひ（一九五五年、俳句二）  
火を焚きて病院裏の土焦がす（一九五五年、俳句二）  
つぎはぎの診療着園枯るゝ中（一九五五年、俳句二）

以下は、鈴木六林男編「西東三鬼全句集拾遺」（『季刊俳句』第二号、一九七四年、中央書院）（鈴木六林男選『西東三鬼集』（現代俳句の世界9）、朝日文庫、一九八四年、朝日新聞社に収録）に収録された九十三句のなかの「診療俳句」に該当するものは次の七句である。すべて、初出誌は不明である。

病者等が指さし春の川光る  
蟻生まれ貧の病者のてのひらに  
菜の花遠し貧者に抜きし歯を返す  
どん底の患者の血もてわが手染まる  
看護婦の水虫かなし春の雲  
血に染む手硝子の外の朝桜  
朝桜病者に生まれ来て貧し